

国王独裁制による南スラヴ人統一国家維持の試み
— 1934年の野党指導者との交渉を中心に —

材木和雄

広島大学大学院総合科学研究科

広島大学平和科学研究センター兼任研究員

**The Negotiation among King Aleksandar and Opposition
Leaders in 1934:
The Last Attempt of Consolidating the South Slav Nation
State through Monarchist Dictatorship**

Kazuo ZAIKI

Graduate School of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University

Research Associate, Institute for Peace Science, Hiroshima University

SUMMARY

King Aleksandar of Yugoslavia declared the introduction of monarchist dictatorship on January 6, 1929. This was the last effort of holding Yugoslavia and making it into one nation state during the interwar period. The King justified his decision because of parliamentary paralysis and his country's feared disintegration at that time. However, his dictatorship also could not resolve the questions the parliamentary system left. Among those the Croat question was the most important. So that, domestic political situation in this country remained unstable.

The King's dictatorship had two weaknesses. One was that it lacked a strong support among the broad mass of people. The other was that the King did not have so much a strong standing international relations as he had at home. The regime suffered from the pressure from abroad, particularly from France which wanted its Yugoslav protégé to stabilize internal political situation. On the other hand, Italy, which knew domestic problems of this country well, showed arrogant attitudes making territorial pretension.

The leadership of the Croat Peasant Party, headed by V. Maček, opted for the tactic of passive resistance. Such a tactic was based on the conviction that the regime of the dictatorship would at last compromise itself in the area of Croatia and that on the hand, the position of the Croat Peasant Party would be strengthened to such an extent that ruling circles of the dictatorship would be forced to capitulate before the demands of the Croats.

After the proclamation of the dictatorship, two oppositional centers were formed. Belgrade was the center of opposition gathered around the leadership of opposition Radicals, Democrats and the Peasant Party. They were joined by the leadership of Yugoslav Moslem Organization and Slovene People's Party. Zagreb was the base of the Croat Peasant Party and the Independent Democratic Party which had formed a political coalition called the Peasant Democratic Coalition.

Within the Belgrade opposition center, the Democrats were the most active in trying to reach agreement on the formation of a general opposition bloc for a common struggle against the regime of dictatorship. However, the efforts made in that direction had not produced any positive results, because the leadership of the Croat Peasant Party conditioned any agreement with the leadership of Serbian parties by a consent on the

part of the latter to accept an internal political reorganization of the state based on the principle of the a complex state organization.

The King's tactic was basically to encourage the leadership of the oppositional parties to compromise with the regime, making insignificant concession to them. In 1934, a tendency of adjustment of the existing political situation and compromise with the ruling circles was noted among the leadership of the opposition Radicals, the Slovene clericals and the Yugoslav Moslem Organization. However, the Croat Peasant Party did not want to compromise their principles because they knew very well how the King suffered from the difficulties the regime of the monarchist dictatorship had encountered and which also resulted in a decline of Yugoslavia's standing abroad. The King was assassinated in October 1934 and failed to learn that the domestic conflicts were not amenable to his favored manipulative administrative solution.

1 問題の経緯

ユーゴスラヴィアの歴史を彩るセルビア人とクロアチア人の対立は1918年の統一国家の成立と同時に始まる。その発端は国家形態をめぐる見解の相違であった。クロアチア側は、憲法制定議会在憲法と国家のあり方を決定するまでは、各地方の自治権が従来どおりに維持されることを求め、それはセルビア政府も了解したと考えていた。したがって、統一国家は当分の間、単一国家ではあるが連邦制に近い国家形態をとると彼らは思い込んでいた。しかし、セルビア側は、旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人諸地域をセルビア王国の中に統合しようとする彼らの国家構想が暗黙の承認を得たと考えた。国家形態をめぐる同床異夢は当時の力関係によって、セルビア側の主導で決着した。彼らは旧セルビア政府に権限が集中する行政機構をすばやく構築し、1921年制定の憲法で君主制に基づく中央集権的な単一国家を基礎付けた。

その後、ラディッチ率いるクロアチア農民党は国家構造の再編を求めて反対運動を展開した。しかし、クロアチア側の抵抗運動は大した成果をあげなかった。その大きな理由はクロアチア側が一枚岩ではなかったことであった。クロアチアにはクロアチア人とセルビア人の協調を求める政治集団があった。彼らはスヴェトザール・プリビーチェヴィッチを指導者とし、統一国家の誕生後にはセルビアの野党と合流して民主党を結成した。彼らはその後民主党を離れて独立民主党を結成したが、一貫してセルビアの急進党と連立政権を組み、クロアチア農民党と対立してきた。政府はプリビーチェヴィッチらを政府高官に登用してクロアチアの反対勢力を巧みに抑え込んできた。

ところが、1927年秋に劇的な転換が起こった。これまで激しく反目してきたラディッチとプリビーチェヴィッチが同盟関係を結んだのである。両者が過去の経緯を水に流して手を結んだのは、セルビアの政権政党である急進党に対抗するためであった。両者は相前後して急進党と連立政権を構成し、その後に政権離脱を余儀なくされた。その結果、自分たちは急進党政権を維持するために利用されただけであったという憤りを共通してもつことになった。とくに長年にわたりセルビアによる統治の隠れ蓑にされ、クロアチア人の憎悪を一手に引

き受ける羽目になったプリビーチェヴィッチにはこの思いが強かった。

クロアチア農民党と独立民主党は「農民・民主連合」という共闘組織を発足させた。彼らは数の上では連立与党にかなわなかったため、議事妨害を主要な戦術とした。議会の審議では罵声の応酬が連日のように続いたが、1928年6月20日、信じられない事態が起こった。発言中の与党議員が野党の野次に激怒し、拳銃を取り出して野党議員を次々と狙い撃ちにしていった。この結果、二人が即死し、三人が重傷を負った。いずれもクロアチア農民党の議員であり、重傷者の一人は党首のラディッチであった。常軌を逸した行動に走った人物はモンテネグロ選出の急進党議員であり、セルビア人であった。

事件は国中を震撼させた。農民・民主連合は全議員を首都ベオグラードから引き上げさせた。彼らは与党の責任を追及し、議会の即刻解散と自由選挙の実施を求めた。ところが、与党側は事件を個人的な犯行とみなし、野党側の要求を却下した。農民・民主連合は態度を硬化させ、憲法改正と国家形態の変更を求める一方で、セルビアの政党とは今後いっさい交渉をしないと宣言した。彼らは直接、国王に問題解決を求めている。

この結果、政治危機は単に政党間の対立にとどまらず、セルビア対クロアチアという地域間の対立の構図に発展した。農民・民主連合はクロアチアに引きこもり、国家は分裂の様相を帯びた。1929年1月6日、この危機の解決を口実に国王アレクサンダルは、かねてから用意していた計画を実行した。憲法と議会を廃止し、個人独裁制を導入したのである。国王は軍人を首相に据え、一部の政党指導者を体制に取り込んで政権に参加させたが、既成政党の活動自体は禁止した。これはこの国では「1月6日」体制と呼ばれた。

国王は個別の民族主義の表出を戒め、均質的で一体性をもった国民を作ろうとして、ユーゴスラヴィア主義を人民に受容させようとした。この立場を内外に訴えるため、1929年10月3日、国王アレクサンダルは勅令を公布し、国名を「セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の王国」から「ユーゴスラヴィア王国」に変更した。国王は個別の民族名をあえて取り去り、単一の国民国家をイメージさせる国名に変えた。また三民族はそれぞれ歴史的な民族旗・紋章・民族歌などを有していたが、別の法律によって今後はこのような民族的シ

ンボルを公の場で表出することは禁止された。

国王は、国名変更と同時に、国家を構成する33の県を9つの州に再編成した。その際、国王は、クロアチアやセルビアといった歴史的な地域が個別の民族主義や地方割拠主義の温床になり、国家と国民の統合を妨げているという理由から、これらの伝統的な地域単位を解体しようとした。

独裁政権側は当初、議会政治が解決できなかった諸問題を解決すると自己宣伝し、様々な方面に幻想を振りまいたが、その政策のほとんどは人びとの失望や反発を招く結果に終わった。国土の9つの州への再編は中央集権制にはまったく手を付けない改革であったので、クロアチアの反対勢力からはまったく評価されなかった。国民統合のため国王が唱道したユーゴスラヴィア主義も、現実にはそれぞれの民族の伝統や自負心を踏みにじるものであったため、いずれの民族からも反発を招いただけであった。経済の安定と社会問題の解決を求めた人びとも期待を裏切られた。世界恐慌は1930年末から1931年初めに穀物価格の暴落と輸出の減少という形でユーゴスラヴィアに影響を及ぼし始めた。経済的な困難は世界的不況の影響であり、政権側の政策に直接の責任はなかったが、人民の不満は国王と政府に向けられた。

ユーゴスラヴィアの独裁政権は西欧の友好国の間でも評判を落とした。フランスおよびチェコスロヴァキア政府は独裁体制が長期化し、積年の諸問題を解決できていないことに苛立ちを見せていた。フランスは1930年の時点でユーゴスラヴィア政府に憲法と議会を復活させるように示唆し、これを経済的、財政的援助の条件とする態度をちらつかせていた。フランスはこの国にとって最大の経済支援国であり、その政府の意向は無視できないものであった。このような内外の不満や圧力に対処するため、独裁政権側の内部では妥協策が検討された。もっとも、国王を始め、独裁政権の指導者は本質的にこの体制を変化させるつもりはなかった。彼らは独裁制の基本的特徴を維持しつつ、ただ外見上その形態を変化させる措置を導入しようと考えていただけであった。

1931年9月、国王アレクサンダルは勅令によって憲法を制定し、立憲制に戻した。11月には政府提出の候補者名簿だけで総選挙を実施した。しかし、結果がわかっている選挙に対し有権者の関心は低かった。この選挙の道義的な勝利

者は、選挙をボイコットした野党勢力であった。総選挙の結果はフランス政府を失望させ、この国の指導者の統治能力を疑わせた。このことから政権側は国内問題の解決に向けた努力の姿勢を示さなければならなかった。

この国の野党勢力は二つのグループに分かれた。一つはセルビアのベオグラードを活動の拠点としたグループであり、もう一つはクロアチアのザグレブを活動の拠点としたグループである。前者の代表政党は、急進党、民主党、農業者党のセルビアの主要三党であり、ボスニア・ヘルツェゴヴィナのユーゴスラヴィア・ムスリム機構ならびにスロヴェニアのスロヴェニア人民党もこのグループに分類される。ザグレブ陣営の中核は、クロアチア農民党と独立民主党の共闘組織である農民・民主連合であった。二つの野党陣営は議会制時代の対立を引きずって、独裁制の導入後も政権側に対して足並みをそろえた行動をとることができなかった。しかし、この国の手詰まり状態を打開する鍵は農民・民主連合との協定の締結にあることはベオグラードでは政権側にも野党側にもよく認識されていた。そこで、1932年になってベオグラードの与野党政治家は、農民・民主連合に政治協定の締結をしきりに働きかけるようになった。

このような状況を受けて、1932年11月、農民・民主連合は協定締結の前提条件を幹部会決議の形で提示した。これは5項目に分けられていたので「ザグレブ条項」と呼ばれた。それは第1項で民主主義と人民主権の原則を明確に述べて独裁制を否定する立場を強調し、第2項では人口の上で圧倒的多数者である農民の意思を尊重する立場を明らかにした。しかし、第1項と第2項は国王独裁制に対するすべての批判者が承認する当然の原則であるのでそれほど注意を引かなかった。これに対し、農民・民主連合の外部の勢力の間で大きな論議を呼んだのは第3項以下の項目である。

第3項はセルビアの優越的支配を批判した。第4項はこの国のあらゆる地域からセルビアの優越的支配を一掃するため、この国の初期状態に戻せと主張した。この国の初期状態とは国家統一の宣言がおこなわれた1918年12月1日を指している。しかし、この文書のいう1918年の状態は12月1日の時点の状態なのか、それともそれよりも前の時点の状態なのかは判然としないので後に物議を醸すことになった。第5項は新しい国家形態の構築を求めた。求められる

国家は一つの構成員が優越的支配を行使する国家ではなく、その構成員の自由意思に基づいた利益共同体であり、それによって、セルビア人、クロアチア人、スロヴェニア人の三民族の対等同権が保証されるような国家であった。

ザグレブ条項は国内外に大きな反響を呼んだ。特筆すべきは、農民・民主連合に続いて、プレチャニンと呼ばれる旧オーストリア＝ハンガリー領南スラヴ人の野党勢力が同種の決議を相次いで採択したことである。もちろん、クロアチアの野党勢力とその他のプレチャニンの政治勢力との間には組織的な連携関係はなかった。しかし、その他の地域の政治勢力が出した決議はザグレブ条項に共感と連帯を表明する内容になっていた。この意味でプレチャニンの共闘戦線は理念的に形成された。これに触発されて、セルビアの野党も党员や支援者に向けて同種のメッセージを発信した。

野党勢力の政権批判の合唱に対して政権側は、野党指導者の逮捕・監禁という強権の発動で応じた。なかでも、もっとも重い罰を課されたのは農民・民主連合の指導者であるヴラツコ・マチェックであった。1933年4月、彼は3年間の懲役刑を宣告された。その罪状は体制批判の宣伝であった。これは国内外の世論を驚かせた。たしかにマチェックは外国紙に対し、クロアチア農民党の要求が受け入れられない場合にはユーゴスラヴィアの枠組み外でのクロアチア問題の解決の道もあり得ると述べた。これはクロアチアの分離独立を示唆する発言であった。しかし、彼は何か具体的な行動を起こしていたわけではなく、この程度の発言だけで3年の実刑判決を受けるとは信じがたいことであった。

マチェックに対する措置は野党への見せしめであった。しかし、この国の手詰まり状態は何らの変化がなかった。マチェックの逮捕後には与党内のクロアチア人集団が政治的なポジションを修正し、野党勢力に接近した。彼らがこのような行動に出たのは、「1月6日体制」の土台が大きく揺らいでいると見ていたからであった。独裁制を隠すためになされた擬似的な憲法と議会政治の導入は明らかに裏目に出ていた。政権側の打ち出す措置は人民の不満を助長しているだけであり、クロアチアではクロアチア農民党の地位を強化しているだけであった。1932年11月の農民・民主連合の決議のあと、議会外の野党勢力がそろって同じような行動に出たのは、人民の支持を欠いた国王の統治政策の失

敗を裏書きしていると彼らは見た。これは正しい見方であった。

ユーゴスラヴィアの置かれた国際的な状況を鑑み、国王は内政の安定を誰よりも欲した。マチュックらと協定を成立させるためには、何らか形でクロアチアに自治を承認することが必要であった。ところが、国王は旧ハプスブルク領人民の不満の背景を理解せず、根本的な解決策を提示できなかつた。私見によれば、とくに致命的だったのは、複合的な国家編成の必要性を理解しようとしなかつたことである¹。事態の打開のために国王が試みたのは野党勢力を分断し、最小限の譲歩で個別に政権側に取り込むこむことだけであった。しかし、国王が苦況に置かれていることは野党側もよく承知していた。それゆえ、彼らは国王の足下をみて、容易に譲歩をしない姿勢を示した。国王と野党勢力との交渉は成果を見ないまま、国王の暗殺によって幕を閉じることになった。

国王アレクサンダルについては、第一次世界大戦中にセルビア軍の一時撤退を決断し、救国の指揮官として側面を評価する研究もある²。たしかに国王はロンマンではあったが責任感が強い人物であった。しかし、政治家としては視野が狭く、複雑な多民族国家の統治は荷の重い課題だったように思われる。本稿は、1934年に展開した国王と野党との交渉のプロセスに焦点を当てて、国王の政治手法の行き詰まりを見る。それは、南スラヴ人を中央集権的な単一制国家に統合する試みが、独裁制という最後の手段によっても行き詰まりに陥った一断面を明らかにする作業である。

2 ユーゴスラヴィアをめぐる国際関係と国王アレクサンダルの苦悩

1932年11月初め、国王アレクサンダルはセルビアの野党三党の指導者に対し取り込み工作をおこなった。仲介役を務めたのは、ジヴォイン・バルグジッチであった。彼はベルリン駐在のドイツ大使を務めていた人物であり、このとき一時帰国していた³。

国王の考えを代弁しバルグジッチは彼らに対し、この国は内政上の問題が深刻であることに加え、外交上の危機にさらされていると伝えた。国王の観測によれば、イタリアならびにその同盟国のハンガリー、ブルガリア、アルバニア

に対する戦争は近い将来に迫っていた。このような状況だから、国内の政治構造の転換を今おこなうのはリスクが大きい。むしろ、この国が置かれた状況は、野党指導者が国王の下に結集することを求めている。バルグジッチは国王の意向をそう伝えた。これはいいかえると、対外的な危機を考慮して野党の立場を捨て、現行の政治体制を支持せよということだった。バルグジッチは、国王がセルビアの野党指導者を上院議員に指名する意向をもっていると伝えた⁴。

しかし、セルビアの野党三党の指導者はこの提案を拒否した。国王の解決策は野党側に大幅な譲歩を迫る一方で、見返りが少ない案だったからである。彼らは「1月6日体制」以前の政治体制の復活を求める立場を変えなかった。もっとも、国王の働きかけは無意味ではなかった。国王とセルビアの野党指導者との接触は、農民・民主連合の「1932年11月7日決議」（ザグレブ条項）の採択の直前におこなわれた。そのため、国王がもっていた危機感は、この決議後の野党指導者の反応ならびに野党間の関係に影響を与えた。たとえば、スタノエヴィッチがセルビア三党の共同決議の案に署名を拒否し、ヨヴァノヴィッチがザグレブ条項に最後まで沈黙を守ったのは、恐らくは国外情勢に関する国王の警告を考慮に入れてのことであった⁵。

国王の懸念には一定の根拠があった。イタリアは1915年のロンドン条約で約束された領土の一部がパリ講和会議で認められず、最終的にはユーゴスラヴィアに帰属したことに大きな不満をもっていた。彼らはアドリア海に面するダルマチア地方およびその島嶼部を欲していた。1932年夏、ムッソリーニは領土問題に関して傲岸な発言を繰り返した。彼の態度は口先だけではなかった。イタリアはユーゴスラヴィアとの国境に軍事施設を建設し、軍隊を集結させていた。他面で周囲の国々はこの国との国境線に不満をもつ国ばかりであり、このうちブルガリアとハンガリーは仮想敵国といってよいような国であった。

国王はイタリア政府と友好協定を結び、この方面からの危険因子を除去したいと考えた。これはイタリアの侵攻だけを想定したものではなかった。イタリアには国家の転覆をねらうウスタシの拠点があった。したがって、イタリアと協定を結べば、クロアチア人過激派の運動は壊滅的な打撃を受けるはずであった。彼はまたイタリアと協定を結ぶことによってアドリア海の安全を確保した

いと考えていた。そのため、アレクサンダルは協定を成立させるためであれば、可能な譲歩は何でもおこなう構えを示した。たとえば、彼は、アドリア海沿岸部の要衝であるボキ・コタル港をイタリアと共同利用する可能性さえ検討した。またアレクサンダルは、アルバニアに対するイタリアの権益を承認するつもりであった。このような態度によってアレクサンダルはイタリアとの友好関係を真剣に望むことを示そうとした。この協定が成立すれば、アレクサンダルはフランスに代えてイタリアを主要な同盟国にしてもよいと考えていた⁶。

ところが、イタリアはユーゴスラヴィア側の提案を留保していた。ムッソリーニは、イタリアとの友好協定を積極的に求めようとするアレクサンダルの態度にユーゴスラヴィア側の苦境を読み取っていた。ムッソリーニはセルビア人とクロアチア人の争いがエスカレートして内戦が勃発することを期待し、これに乗じてユーゴスラヴィアに武力侵攻する機会を窺っているようだった。アレクサンダルはクロアチア問題の解決に自信を示したが、ムッソリーニはユーゴスラヴィアとの正式な交渉を始めようとはしなかった。彼は 1934 年 5 月には、アレクサンダルのメッセージを持参した外相イエフティッチとの面会を拒否し、両国の水面下の交渉は幕を閉じた⁷。

イタリアとの緊張関係が続く一方で、1933 年 1 月、ドイツでナチスが政権を獲得した。これによってヴェルサイユ体制の打破を求める勢力は一段と勢いを増した。この状況に対し、ユーゴスラヴィア、チェコスロヴァキア、ルーマニアの小協商三国は 1933 年 2 月、ジュネーブで新たな協定に調印し、同盟関係を強化した。しかし、ユーゴスラヴィアにとって大きな問題はフランスとの関係がぎくしゃくしていることであった。

経済支援の条件として内政上の諸問題の解決を求めていたフランスの政治指導者に対し、国王アレクサンダルは 1931 年の憲法制定と議会の復活によって回答を提示したつもりであった。しかし、フランス政府はこの解決策に満足せず、1932 年以降新たな借款の供与を停止していた。1933 年前半のユーゴスラヴィアの政情不安と政権側の対応はフランス政府のさらなる苛立ちを招くことになった。野党側の体制批判に対して、ユーゴスラヴィア政府が強権的な手法で抑圧する以外に目立った対策を示さなかったことをフランス政府は大いに不

満とした。フランス政府はベオグラード駐在の大使に命じて国王アレクサンダルと会談させ、問題の抜本的な解決を促した。フランス側はユーゴスラヴィア側に対しクロアチアの野党勢力の要求に譲歩すべきことを助言したが、アレクサンダルは諸地域を単一制国家に統合する路線を放棄するとこの国は解体が始まると述べてこれを拒否した。彼はまた外交政策上の理由からも集権的な単一制国家を維持する必要性を強調した⁸。

ヴェルサイユ体制の動揺とこの国が置かれた不安定な国際関係は、ユーゴスラヴィアの近未来が不透明であることを示唆した。このため、国王アレクサンダルは国内政治の安定化という課題にこれまで以上に真剣に取り組まざるを得なくなった。内政上の問題を抱えていては、対外的な交渉力は弱くなるばかりだったからである。しかしながら、振り返ると、「1月6日体制」の成立以来、体制の安定化のためにアレクサンダルが打ち出した措置はすべて失敗に終わっていた。この間、議会制時代の有力な政党は国王との妥協を拒み、体制外野党として消極的抵抗を続けていた。彼らはそれによってこの体制に不満をもつ一般国民の共感を獲得し、道義的資本を蓄積していた。したがって、国内政治の安定化のためには彼らと協定を成立させ、体制内に取り込むことが必要であった。その際、特別の意味をもつのはクロアチア人の間に絶大な支持基盤を持つクロアチア農民党指導部との協定であった。なぜなら、もしそれが実現すれば国王はクロアチア問題の最終的な解決を宣言できた。それは内政上の懸案の消滅を意味した。そうなれば、ユーゴスラヴィアの対外的な地位は大幅に改善され、敵対国に対しても友好国に対してもこの国はより強い態度で交渉に臨むことが可能であった。

外交政策上の困難に加えて、国内の経済的および政治的状況も政権側にとってはまったく芳しいものではなかった。政権側は、1932年前半の学生の抗議運動と各地の農民騒擾、1932年末から1933年初めの野党による体制批判の合唱を何とか乗り切ったが、国民の間の不満は少しも解消されていなかった。深刻な経済危機の進行し、貧富の格差が大きくなる一方で、国民の不満を代弁する政治活動が抑圧されていることは、既成政党以外の政治勢力が伸張していく土壌を提供した。とくに共産党はまだ大きな影響を与える政治勢力にはなってい

なかったが、やり場のない下層民衆の不满を吸収して顕著に支持基盤を拡大しつつあった。このような状況は、国王や政権指導者だけでなく、野党指導者の側にも懸念材料としてとらえられた。彼らは、そのうちに社会的政治的な激震が起これ、最悪の場合には国王独裁体制だけでなく、ブルジョア的な政治経済秩序そのものが崩壊してしまうのではないかと心配した。それゆえ、国内政治の安定化に向けた妥協策は野党指導者の側からも提案されることになった。これにもっとも積極的であったのはセルビアの急進党である。

3 急進党の政権構想とこれに対する農民・民主連合および国王の態度

1934年1月末、首相のスルシュキッチは辞表を国王に提出した。基本政策をめぐる閣内不一致により、予算案も提出できなくなったためである。国王はニコラ・ウズノヴィッチを後継の首相に指名した。ウズノヴィッチはユーゴスラヴィア国民党と名を変えた与党の総裁であった。しかし、ウズノヴィッチ政権についてはその発足の当初から短命説が流れた。予算を成立させるまでの暫定的な内閣だと噂されたのである。いずれにせよ、翌年に総選挙を控える時期になったので、国王が誰に選挙の実施を委ねるのが関心の的となった。こうした動向に影響されて野党陣営の動きも活発化した。その中でもっとも積極的な反応を示したのは急進党であった⁹。

急進党の政権構想は現行の政治体制を承認することを前提としていた。したがって、彼らが政権をとったとしても、現行の憲法は変更しない。ただし、新政府は政治活動の自由化に着手する。政府はマチェックを始めとする政治犯の恩赦を国王に求め、結社・言論・集会の規制を大幅に緩和し、これまで活動を禁止されてきた諸政党を政治の場に復帰させる。その上で議会を解散し、自由な選挙を実施する。投票の仕方は秘密投票である。その次の段階でクロアチア問題の解決のための交渉を開始する。急進党の構想は国王が制定した憲法を受け入れることで彼の信頼を獲得し、他方で一定の自由化を導入することで政治に変化をもたらし、国民の期待と支持を確保しようとするものであった¹⁰。もっとも、これは、民主党のダヴィドヴィッチが提唱する全野党連合政権の代案

として、急進党指導部が以前から温めていた構想であり、この年に新しく練り上げられた案ではなかった。

彼らの戦略の新味は、この構想を新しい政治集団の組み合わせで実現しようとしたことにあった。それは、急進党、スロヴェニア人民党、ユーゴスラヴィア・ムスリム機構、人民クラブの四つの政治集団の結合であり、「四党連合」と呼ばれた。このうち、人民クラブとは、農民・民主連合の幹部会決議に影響されて与党を離脱したクロアチア人議員の集団である。急進党は、新しい政権にはクロアチア人の参加が欠かせないと考えていた。この政権の優先的な課題の一つはクロアチア問題の解決であったからである。しかし、農民・民主連合の主張から判断して彼らが政権に協力する見込みはなかったため、急進党は次善の策として人民クラブに彼らの代役を担わせようとした。もっとも、人民クラブの政権参加は暫定的なものであり、人民クラブのメンバーには農民・民主連合を政権に近づける環境作りをさせたいと急進党は考えていた¹¹。

急進党はこの国の政治は袋小路に陥っており、国王も内心非常に困っていると見ていた。そのような国王に対し、四党連合による新政府の樹立は次のような理由で非常に有望な解決策を提供するはずであった。第一に政治の刷新、ないしはそうした印象の付与である。現政権は経済政策の上でも政治改革の上でも失敗を重ねているばかりか、内部の派閥対立と路線闘争によってしばしば機能不全になり、権威を失墜させている。四党連合による政権交代は、旧政権の担い手を一掃し、セルビア、スロヴェニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナ、クロアチアの一部を支持基盤とする強力な政治勢力に置き換えられる。第二にセルビア、スロヴェニア、ボスニア・ヘルツェゴヴィナを代表する政党の結集によって、クロアチアの農民・民主連合に包囲網を敷くことができる。孤立した彼らは妥協を迫られる。彼らがたとえ譲歩しないとしても、この国の内政は一定期間安定する。なぜなら、この政権はセルビア人、スロヴェニア人、ムスリム人を代表する政党によって構成され、クロアチア人政治家の一部も支持を与えている政権だからだ。これはこの国の政情に関して対外的な印象を改善することにもなる。第三に四党連合政府によってプレチャニンの理念上の共同戦線は崩壊する。なぜなら、この政府にはスロヴェニア人民党、ムスリム機構、お

よび人民クラブが参加しているからだ¹²。

ユーゴスラヴィア・ムスリム機構、スロヴェニア人民党と人民クラブの各指導部は急進党の政権構想を好意的に受け止めた。残るはフヴァール島に軟禁されていたスロヴェニア人民党党首のコロシェッツに対する説明だけとなった。コロシェッツがどのような反応を示すのかはムスリム機構や人民クラブも大きな関心をもった。1934年2月半ば、コロシェッツは、急進党幹部のミレティッチとの会談で急進党の構想に原則的に同意したが、国王がこのような政権構想に本当に同意するか確信が持てなかったため、最終的な態度を保留した¹³。

農民・民主連合の指導部は、人民クラブのメンバーから情報を得て急進党の企てを知った。彼らはこの計画が実現した場合の影響を憂慮した。1932年11月7日の農民・民主連合の決議の後を追う形でスロヴェニア人民党とムスリム機構は同様の決議を採択し、この結果、彼らは急進党から距離を置くようになった。これは農民・民主連合側にとっては歓迎すべき事態であった。農民・民主連合は彼らと協定を結ぶまでには至らなかったが、各党が出した決議には共通の方向性があり、プレチャニンの野党勢力の間には理念的な共同戦線が形成されていた。しかしながら、コロシェッツとスパホが再び急進党に取り込まれると、このプレチャニンの理念的な共同戦線は崩壊してしまう。そうになると農民・民主連合は孤立し、交渉力を弱められると農民・民主連合指導部は考えた。これはまさに急進党がねらっていたことだった。

もともと、マチェックに代わってクロアチア農民党を指導するトルムビッチは、たとえ急進党の計画が成功したとしても、クロアチア問題をめぐる状況は大きく変化しないと見ていた。クロアチアにとっては好都合な状況が二つあった。第一に宮廷からもセルビアの野党からも、クロアチア問題について協定を結ぼうとする働きかけが活発になっている。これは、クロアチア問題が彼らにとって優先的に解決すべき問題になっていることを示している。第二にクロアチア問題が国際社会に認知されてきたことである。ここでクロアチア農民党が安易に協定を結ぶと、諸外国の中で芽生えてきた支持を失うことになりかねない。「我々のとるべき戦術は物分かりのよい態度を示すことではなく、根本問題の解決方針を貫くことだ」。トルムビッチはそう述べた。四党連合はクロア

チア人を一時的に不利な状況に置くとしても、我々は既定の方針を変えてはいけない。トルムビッチは他の党幹部にそう論じた¹⁴。

1934年3月2日、農民・民主連合は会合を開いた。集まった幹部は、トルムビッチ、イエラシッチ、シューテイ、スモーリヤン（以上クロアチア農民党）、ヴィルダー、ブディサヴレヴィッチ（以上独立民主党）であった。彼らは四党連合の実現を阻止する手だてを協議した。シューテイはフヴァール島にスモーリヤンを派遣することを提案した。コロシェツに急進党の誘いに乗らないように働きかけ、それによってスパホの翻意を引き出そうと彼は考えていた。独立民主党も急進党の計画を快く思っていなかった。急進党は彼らの存在を考慮の外に置いていたからである。この会議で注目されるのは、独立民主党のヴィルダーの発言とトルムビッチがとった対応である。ヴィルダーは、コロシェツと連携するには何らかの相互協力のための方針を提示する必要があるのではないかと提起した。彼の考えはこうだった。「農民・民主連合は経済政策に重点を置いて働きかけをおこなうべきである。なぜなら、それはもっとも喫緊の問題だからだ」。これを受けて、トルムビッチは以下の決議案を提案し、それは満場一致で採択された。「我々は基本政策の点では1932年11月7日の幹部会決議が提示した見地を堅持する。この決議に呼応して、コロシェツとスパホはそれぞれ彼ら自身の決議を公表し、我々川向こうの陣営には理念上のブロックが形成された。このブロックは結束を強化し、ここ数年間妨げられてきた共同行動に移行する必要がある。経済的な問題が浮かび上がっている。これはこれまで限定的にしか取り組まれなかった問題だ。それは支配層に蔓延する腐敗によって、差し迫った解決を要する問題になっている。この腐敗の原因は独裁体制の中にある。行政の腐敗は経済を台無しにし、窮乏化と貧困、社会的不公正をもたらした。これに対する特効薬は、独裁制の破壊、人民の意思と要求の実現であり、自由な選挙である。これは、セルビアの野党を含めて、独裁政権から独立したすべての勢力によって受け入れられるものであろう」¹⁵。

この会議で注意を引くのは、これまで消極的抵抗を頑強に主張していたトルムビッチが積極的な行動を支持し、独立民主党のヴィルダーの考えを採用した決議案をとりまとめたことである。これは、急進党の計画が成功すると、これ

まで農民・民主連合がとってきた待機戦術に独立民主党が従うかどうかわからなくなるというクロアチア農民党幹部の不安に配慮したものであった¹⁶。

1934年3月、スモーリヤンはコロシェッツと面会し、農民・民主連合のメッセージを伝えた。コロシェッツは急進党との話し合いを説明した。コロシェッツは四党連合の計画が実現するには何よりも国王の承認が必要であると考えていた。ところが、ミレティッチは国王の承認を得ていないと述べたので、コロシェッツはそれならこの計画は無意味だと述べた。なぜなら、もし国王が状況の変化を望まなかったら、すべては徒労になってしまうからだ。彼は急進党側に国王の承認をとってから話し合いを開始すべきだと述べていた¹⁷。

コロシェッツ自身は最終的な態度を決めていないことを示唆した。彼は、急進党の計画に国王がどう反応するかを見たいと考えていた。そのため、彼は側近をベオグラードに派遣し、情報収集に当たらせていた。コロシェッツは、その結果をクロアチア農民党指導部に知らせることを約束した。しかし、コロシェッツは、急進党の計画は成功の見込みがないと見ていた。第一に国王の気質から見て、急進党の提案を易々と受け入れるとは考えられなかった。第二に国王は自分の意思のままに動く政党をもっており、これを捨て去り、四党連合に切り替える理由はなかった。この体制に変更があるとすれば、それは唯一、国際情勢と腐敗を理由としてのことだろうとコロシェッツは考えていた¹⁸。

急進党の計画の実現性は国王の判断に依存していた。1934年3月半ば、急進党は国王に覚え書きを提出し、選挙管理内閣の形成を急進党に託すように進言した。1934年5月9日、四党代表による事前協議が終わった段階で、急進党のミレティッチは宮廷に向かった。彼は四党連合による政権構想を国王に説明した。国王はしかし、この構想を受け入れなかった。急進党の政権構想は二つの点で国王の意向に沿わない内容を含んでいた。一つは、与党であるユーゴスラヴィア国民党に見切りをつけよという点であった。しかし、コロシェッツが考えていたとおり、国王はこの政党を捨て去る気にはならなかった。もう一つの点は、急進党の政権構想は、議会制時代の政党を政治の場に復帰させることをめざしていた。しかし、これは、議会制時代の政党間の醜い対立を鮮明に記憶している国王には、到底容認できない要求であった¹⁹。

このとき国王はまったく別の政権構想をもっていた。それは与党内の急進党グループと野党の急進党を和解させ、合同させることであった。国王はこの組み合わせにスロヴェニア人民党を参加させようと考えていた。急進党は四党連合の形成によって政権与党の役割を引き受けようと考えていたのに対し、国王はむしろ四党連合の側を政権与党に吸収しようと考えたのであった。

国王は、首相のウズノヴィッチを呼び、ミラン・ストヤディノヴィッチを窓口にして急進党と交渉するように命じた。ウズノヴィッチはストヤディノヴィッチを招き、国王の意向を伝えた。彼は、国王はまたコロシェツとも協定を結びたいと考えていると伝えた。そうすれば、政権与党はユーゴスラヴィア的な性格を獲得すると考えられるからであった²⁰。ストヤディノヴィッチは国王に謁見した。国王は自分の計画を彼に説明し、ウズノヴィッチと急進党党首のスタノエヴィッチとの会談を取り持つように命じた²¹。

この結果、1934年5月末、ウズノヴィッチとスタノエヴィッチは会談の機会をもった。ウズノヴィッチはスタノエヴィッチに協力を求めた。スタノエヴィッチは国王の構想を基本的に受け入れた。ただコロシェツがどういう態度をとるかを見極める必要があり、国王の構想はこれから急進党の総務会に報告する必要があるとスタノエヴィッチは述べた。しかし、このあと仲介役のストヤディノヴィッチが私用で渡米したので、交渉は進展しなかった²²。

ストヤディノヴィッチは1934年7月半ばに帰国した。国王は秋にはフランスを公式訪問する予定であった。したがって、国王の計画は一刻も早く実現させる必要があった。ストヤディノヴィッチは、国王がフランスに出発する前にコロシェツの軟禁を解くことを提案した。彼によれば、そうすればコロシェツは国王の構想に好感をもち、またフランスの世論にもよい印象を与えるはずであった。首相のウズノヴィッチはこの提案を国王に伝えた。しかし、国王はコロシェツの釈放に難色を示した。彼は、コロシェツが与党との協定に同意することが先だと主張した。そうすれば、フランスへ向かう洋上で電報を打ち、コロシェツに恩赦を与えると国王は述べた。国王はフランス到着後に記者会見を開き、この決定を伝えて世論の歓心を得るつもりであった²³。

この指示に沿って、ストヤディノヴィッチはフヴァール島のコロシェツを

訪ねた。彼はウズノヴィッチとスタノエヴィッチとの協定と新政権の樹立の構想をコロシェッツに説明し、この計画の成否はひとえに彼の態度に依存していると強調した。より具体的には国王と王室、ユーゴスラヴィアの統一、および急進党とスロヴェニア人民党との連立政権に対し、コロシェッツが疑問の余地のない支持を表明した場合にのみ、この計画は実現されるとストヤディノヴィッチは述べた。これは、1932年末にコロシェッツ自らが署名した体制批判の決議を否定し、現行の憲法を受け入れる態度を示せということであった²⁴。

ストヤディノヴィッチの感触によれば、コロシェッツはこの計画には反対ではないようだった。しかし、そのような声明を出してよいものかどうか迷っていた。コロシェッツは、国王と王室に忠誠を誓ったあとも軟禁が続くのではないかと心配した。国王が自由を与えた後のコロシェッツの行動を心配したのと同様に、コロシェッツも言質を取られたあとの国王の措置に確信が持てなかった。しかし、ストヤディノヴィッチは懸命に説得し、この計画には嘘や畏はないことを強調した。その結果、妥協が成立した。ウズノヴィッチがコロシェッツの釈放を確約した場合にのみストヤディノヴィッチがこれを手渡すという条件を付けて、国王に向けて手紙を書くことにコロシェッツは同意した。文章自体はストヤディノヴィッチが起草することになり、彼はこれをコロシェッツに読み聞かせた。コロシェッツはなお署名を渋ったが、一晩置いてこれに署名した。しかし、ストヤディノヴィッチがコロシェッツの声明をベオグラードにもってきたのは、10月9日、マルセイユで国王が殺害された日であった²⁵。

4 国王アレクサンダルとマチェックとの対話

他方で、国王は常にクロアチア農民党との協定の可能性を探っていた。国王の願望はベオグラードの政治家はよく承知していたので、国王の好感を得たいと思う者は何とかクロアチア農民党指導部と接触を試みようとした。これは野党陣営だけでなく、与党側でも同じであった²⁶。

しかし、マチェックに代わってクロアチア農民党を指導するトルムビッチの方針はこうであった。「マチェックが獄中にいる限り、立ち入った話し合いに

は決して応じない」。トルムビッチはセルビアの野党代表に対しても、政府や宮廷との関係を背景に接触を求めてくる者に対しても同じ態度をとった。政権側がクロアチア問題の解決を急いでいるのは彼らが袋小路に陥っている証拠だとトルムビッチは見ていた。彼によれば、国際情勢は政権側には非常に好ましくない状況を呈しており、これはクロアチア側には有利な状況であった。それゆえ、クロアチア側はこのような状況を利用して消極的抵抗の方針を断固貫くべきであり、安易に妥協をして決して政権側を助けるようなことをしてはならないとクロアチア農民党幹部に論じていた²⁷。

1934年に入り、国王アレクサンダルはマチェックに対し直接的な対話を試みるようになった。これを受けたマチェックは、国王をめぐる状況をこう解釈した。国王はフランス政府からの圧力に苦慮しており、クロアチア問題にできるだけ早く決着をつけたいと考えている。ところが、これまで国王はマチェックを通さずに問題を解決できないかと様々な策略を仕掛けてきたが、それらはことごとく失敗に終わった。そこで、やむなくマチェックに直接的に働きかけを試みざるを得なくなった²⁸。恐らくこれらは正鵠を得た分析であった。国王にとっては、フランスだけでなく、同盟国の政府や世論を納得させるためにはマチェックと協定を結ぶこと、あるいは少なくともマチェックに政権側との和解を表明させることは避けられない課題になっていたからである。

この対話の仲介役を務めることになったのは、マチェックの友人であるイワン・シュバシッチである²⁹。1934年1月25日、シュバシッチと接見した国王は質問を投げかけ、回答を求めた。国王がもっとも知りたがったことは、マチェックがユーゴスラヴィアの枠組みの中で要求を実現しようとしているのか、それともこの国家の枠組みの外で要求を実現しようと考えているのかということであった。国王は、自分に伝えられる情報は後者を指示するものが多いとシュバシッチに述べた。たとえば、彼は、マチェックについて、頑固でもうろくしたフランク派の人間であり、政権側とはまったく協働や協力の意思がないという情報があると語った。シュバシッチはこのような情報をすべて否定し、マチェックはこの国家の礎の上で仕事をする意思があると答えた。マチェックが協力を拒んでいるのではなく、これまでの政権がマチェックの協力を妨げてい

るのだとシュバシッチは自分の考えを述べた。それによって彼は、条件次第ではマチェックが国王側と協定を結ぶ意思があることを示唆しようとした。会談を終えた国王はシュバシッチに好感をもった³⁰。国王は数日後、シュバシッチの要望に応じて、マチェックに自由に面会できるように取りはからった。

1934年3月1日、シュバシッチは服役中のマチェックと面会した³¹。マチェックは後に手紙で彼に返答した。マチェックは、国王と政権側がクロアチア問題の解決を求めるフランス政府の圧力にどう対処するか苦慮していることをよく承知していた。ところが、自分の協力なしにはこの問題の解決はあり得なかった。あらゆる方面から自分の協力を求めて働きかけがなされるのは、自分が協力しなければ事態が進展しないことを彼らがよく自覚しているからだ。これは好都合な状況だとマチェックはとらえていた。しかし、このような見方をするからといって、自分がユーゴスラヴィアの国境の内部での協定を求めていると結論づけるのは間違いだとマチェックは述べた。ただし、彼はこう付け加えた。もっと大きな誤りは、自分が獄中で弱気になったと彼らに確信させることであり、彼らをして国内外の世論にそのようなイメージを与えることに成功させることだ。これは、いかなる働きかけがあってもマチェックは獄中では安易な妥協をするつもりはないことを示唆する発言であった。マチェックはシュバシッチに対し、もし自分たちの側に立って助力をしたいと思うならば、国王側には面従腹背の姿勢を貫いて欲しいと述べた³²。

数日後シュバシッチはベオグラードに戻り、国王に報告した。シュバシッチとの最初の接見に際し、国王が知りたがったことは、条件を整えば国王や政権側に対してマチェックが協働の意思があるのかということであった。いいかえれば、ユーゴスラヴィアの枠組みを前提にして自分たちと協定を結ぶ意思があるかどうかを国王は知りたかった。これに対して、シュバシッチはマチェックの発言を伝えた。「自分は政権側との協働を欲しないといったことは一度もない。ただし、今度は同じ過ちを犯してはならないと考えている」。これは1925年に国王の薦めにより前党首のラディッチが獄中で妥協をして急進党と協定を結ぶ決断をしたことを指していた。マチェックはこう述べた。「ラディッチの最大の誤りは監獄の中で政治交渉をしたことだ。それがなければ国民議会での

殺人事件は起きなかっただろうし、クロアチア問題はすでに解決されていたことであろう」。これを聞いた国王は、それはその通りだろうと認め、自分はマチェックに対して脅迫じみたことをするつもりはないし、他の者にもそのようなことはさせないと述べた。その上で、国王はシュバシッチに命をかけてマチェックが協働の意思があると保証できるかと尋ねた。シュバシッチは保証できると答えた。しかし、国王はなお納得していなかった。国王はシュバシッチの発言を信頼していると断りながらも、マチェックが本当に政権側と協働し、協力する用意があるのかについては不安が残ると述べた。国王はシュバシッチにマチェックとの接触を引き続き依頼し、この件に関してはいつでも面会を受け入れるので報告に来て欲しいと述べた³³。

シュバシッチは再び刑務所を訪ねた。しかし、裁判所長は面会を許可しなかった。シュバシッチは手紙を書き、弁護士に託した。1934年5月9日、シュバシッチは三度目の謁見をした。シュバシッチは、裁判所の妨害によってマチェックと自由な会話ができなかったことを報告した。このあと国王の命令により、シュバシッチはいつでもマチェックと面会ができるようになった。このときも二人の会話は同じ問題をめぐった。国王は、マチェックが本当に協働の意思があるのかを疑っていた。彼はシュバシッチに対し、前回の発言に責任が持てるかと聞き直した。シュバシッチはこれを再び肯定した³⁴。

シュバシッチはこのあと刑務所に行き、国王との話し合いをマチェックに伝えた。マチェックは、口頭でも書面でも自分から恩赦を求めるつもりはないと述べた。なぜなら、この判決は不当であり、自分から恩赦を求めれば不正を容認したことになってしまうからだと彼は考えていた。このあとマチェックはシュバシッチに対し、書面でその考えを述べた。このあと、マチェックの指示によりシュバシッチはベオグラードに戻らず、ザグレブに向かった³⁵。

しかし、シュバシッチはまもなく宮廷から呼び出しを受けた。1934年6月1日、彼は4度目の謁見をした。国王は、マチェックに恩赦の話をしたかと尋ねた。シュバシッチは頷いたが、こう付け加えた。マチェックはこの判決は不当であると考えている。したがって、釈放を求めるために自分の方からはいかなる行動を起こす意思はないと述べている。同様にマチェックは他の者が自分の

恩赦を請願しないように求めた。それは政権側を喜ばせるだけだからだ。シュバシッチ自身も個人的意見を述べ、マチェックに対する判決は不当であると表明した。なぜなら、ザグレブ条項はあくまで内部文書として作成されたものであり、公表を目的として作成されたものではない。またマチェックは、公判の過程で独自の解釈を提示していたからであった。シュバシッチは国王の方が恩赦のイニシアチブをとるように示唆していた。これに対して、国王はこう答えた。「(恩赦を与えるためには) マチェックが現行の国境を前提にこの国家を欲しているのかを聞く必要がある。もし本当に欲しているとしたら、我々と同様に、彼自身もこの国家をあらゆる外敵から守る用意があるのかどうかを聞く必要がある。国際情勢は、我々を明日をも知れない状況に置いている。マチェックはこのことを自覚しなければならない」³⁶。

国王が恩赦の条件としたのは、ユーゴスラヴィアの国境と王制をマチェックが承認することであった。ところが、マチェックは獄中からは決して交渉をしないという立場を貫いた。しかも、それだけではなかった。前回のシュバシッチとの面会では、マチェックは、たとえ自由の身になったとしても、人民を代表して政治的義務を引き受けることはできないと述べた。なぜなら、彼は国会議員の身分を失い、国民の負託を受けて行動する資格を欠いているからであった。したがって、自由選挙の実施が必要であり、その上で国会議員として選出されれば、有効な政治交渉をおこなう資格を獲得すると主張した。これを聞いた国王は、「それは論理的には正しいが、政治的には受け入れられない」と述べた。国王は結果が不透明な選挙を望まなかった。国王はこう述べた。「マチェックはまず政府に入り、その上で協定を結ばなければならない」³⁷。

国王に対してより確実な行動をとるため、マチェックは国際情勢に関する情報を必要とした。そのため、彼はクロアチア農民党幹部のシューテイを国外のクルニェヴィッチとコシュティッチのもとへ派遣した。1934年6月10日、シューテイはインスブルックで二人と会った。

クルニェヴィッチとコシュティッチはシューテイを通し、マチェックに対して次のような情報を寄せた。フランス政府はベオグラード政府に対してクロアチアの野党勢力と協定を結ぶようにしきりに促している。最近ではオーストリ

アをめぐる情勢によって彼らの働きかけはいつそう強くなっている。オーストリアの危機は二つの方法で解決される可能性がある。一つはドイツとの合邦であり、もう一つはハプスブルク王朝の復位である。このような状況の中で、フランスはユーゴスラヴィアの強化を求めている。なぜなら、この国は小協商三国の中ではもっとも重要なファクターであるからだ。フランスはセルビアとクロアチアとの関係の正常化に最大の関心を抱いている。マチェックの釈放はこの関係の正常化の第一歩となるものであり、それゆえ、フランスの圧力によってマチェックの解放が実現するかも知れないと二人は見ていた。もしマチェックが釈放されれば、外国療養を理由に旅券を申請すべきである。もちろん、国王はマチェックの出国を許さないだろう。もし国王がマチェックを呼び、この国の枠組みを支持するのかと尋ねてきたら、この質問に対してマチェックは否定も肯定もしてはいけない。もし否定的な返答をしたらどうなるか。それは国王に対する挑戦と受け止められ、ドナウ河畔の国家連合（チェコスロヴァキア、オーストリア、ハンガリーおよびクロアチア）に対する賛意の表明だと認識されることになる。その場合にはクロアチアには重大な制裁が加えられる恐れがある。ではもしマチェックがこの国家の枠組みを支持すると公言したらどうなるか。彼は刑務所に逆戻りさせられる可能性がある。国王側はこの回答を外国政府に示し、クロアチア問題に対する関心を弱めようと企てるだろう。したがって、マチェックは宮廷に呼ばれたとしたら、次のような原則で行動すべきである。「卑屈になってはいけないし、挑発的になってもいけない」³⁸。

しかし、マチェックがユーゴスラヴィアの枠組みに対して否定も肯定もしない場合には、クロアチア人側はどのような国家構想を持っているのかと国王は尋ねてくる可能性がある。その場合にはこう答えよと彼らは述べた。セルビア人とクロアチア人の見解の相違は、かつてのオーストリアとハンガリーとの関係を模範に解決できる。この場合、議論の余地なくクロアチアに帰属する領土はクロアチア、スラヴォニア、ダルマチアである。ボスニア・ヘルツェゴヴィナについては住民投票をおこない、全体としてクロアチアに加わるか、それともセルビアに加わるかを決めさせる。どちらに所属するか決められない場合には、かつてのオーストリア＝ハンガリー国家の中でクロアチアがもっていたよ

うな地位をボスニア・ヘルツェゴヴィナに与えると提案する。ヴォイヴォディナに関しては、クロアチアはスーボティツァ、ソムボール、B.パランカおよびイロークの三角地帯を求める。モンテネグロとマケドニアに関しては議論しない方がよい。もし国王がオーストリア＝ハンガリーのモデルを拒否したら、クロアチア、スラヴォニア、ダルマチアを一体の領土とし、独自の議会と軍隊をもつ自治政府を求める案に切り替えることにする。もしマチェックが釈放された後も国王に呼ばれなかったとしたら、そのときは消極的抵抗にとどまるべきである。こちらの方からはいっさい行動を起こさず、ベオグラードとは政権側と野党側を問わず、いっさい接触をとらないことである³⁹。

シューテイはクルニェヴィッチとコシュティッチから得た上記のような情報を書面にまとめた。これをイエラシッチが確認し、署名した。1934年6月19日、シュバシッチはこの報告書を携えて、再びマチェックを訪ねた。このときの国王の伝言は、彼はマチェックに対して反ユーゴスラヴィアでないことを表明する以外は何も求めないということだった。マチェックは、それはこれまでの自分の活動が証明していると述べ、これを間接的に拒否した。翌日シュバシッチは5度目の謁見をした。近くフランス外相のルイ・バルトーがやってくるようになっていた。バルトーは、ベオグラードに出発する直前に、クルニェヴィッチ、コシュティッチ、プリビーチェヴィッチが共同で作成した覚え書きを受け取っていた。それには、ユーゴスラヴィアの内部情勢が描かれ、マチェックの釈放のためにフランスが介入する必要があることも述べられていた⁴⁰。

1934年7月15日、敗血症を発病したマチェックは刑務所からザグレブの病院に移送された。これによって、シュバシッチを介してのマチェックに対する国王の対話の試みは一時中断した。病院の中でマチェックは治安機関による監視を受け、外出を禁止された。しかし、家族との面会は許され、医師と看護婦を通してクロアチア農民党指導部と手紙のやりとりをすることはできた。

1934年9月初め、マチェックの指示により、シューテイは二度目の出国をした。今度はシュバシッチも同行した。マチェックはオーストリア情勢に関する情報を求めていた。コシュティッチは手紙で回答を寄せた。彼によれば、オーストリアとドイツの合邦はクロアチアの野党勢力には不利な状況となるが、オ

オーストリアではハプスブルク王朝の復位に同情的な雰囲気が増大しているとのことであった。クルニェヴィッチは補足的な手紙を送った。彼らの手紙は、イギリスがユーゴスラヴィアの内紛の解決に関心をもっていること、ならびに国王アレクサンダルが近くフランスを訪問する予定を告げていた。クルニェヴィッチとコシュティッチは、この会談ではクロアチアの野党に対する政策を変更するようにフランス外相が国王により強く迫るのではないかと見ていた。クルニェヴィッチは待機戦術を放棄し、獲得可能な陣地を確保した方がよいと述べていた。この意味で彼は近く実施される市議会選挙への参加を勧めた⁴¹。

外国政府の圧力を考慮して、国王はクロアチアの野党に対して何らかの宥和策を考えていた。マチェックの備忘録によれば、国王が暗殺される数日前、シュバシッチが国王の伝言をもってきた。それは、フランスから帰国すれば直ちにマチェックを釈放し、その上で彼と会談をしたいと述べていた⁴²。

振り返れば 1934 年春から夏にかけて国王は、セルビア、スロヴェニア、クロアチアの野党代表と個別に交渉をおこなっていた。国王の考えの中ではこれらの交渉は一体性をもっていたと見る必要がある。国王は外交上の立場を有利に導くため、何らかの内政上の転換が必要だと考えていたことは間違いない。

しかし、国王はどのような方向で、どの程度の転換をすればよいのかを慎重に見極めようとしていた。国王が変化の実行をフランス訪問後に先延ばしにしたのは恐らくはそのためであった。これまで国王は常に最小限の譲歩によって反対勢力を個別に取り込み、体制の維持を図ろうとしてきた。今回も彼はそのように望み、フランス政府の態度を見た上で、野党勢力に対してどの程度の譲歩をすれば足りるのかを判断しようとしたと見られる。しかし、彼がどのような計画をもっていたにせよ、それは実現されることはなかった。国王はフランスに到着直後の 1934 年 10 月 9 日に暗殺されてしまったからである。

5 国王独裁制の蹉跌

ユーゴスラヴィアとは南スラヴ人の国を意味する。ところが、この国の南スラヴ人はまとまりを欠き、ユーゴスラヴィアは国民国家としての基盤が脆弱で

あった。とくにクロアチア人は統一国家への帰属意識が弱かった。彼らの政治代表であるクロアチア農民党はセルビアの優越的支配を厳しく批判し、クロアチアの自治権を確立する方向で国家構造の再編を常に求めた。その後、クロアチアの反対勢力と政府・与党連合との対立は国会での殺人事件に発展し、クロアチア側の政治ボイコットによって国家は分裂の危機に瀕した。

1929年1月6日に国王アレクサンダルが導入した独裁制は、議会政治の行き詰まりを根拠として実行に移された。たしかにこの時点では国王の直接的な統治に対する国民の期待は高く、諸民族の宥和と和解を実現する大きなチャンスであった。しかし、この政治体制もまた議会政治が解決できなかった問題を解決できなかった。第一に政治家や行政官の間に蔓延する腐敗であり、これはあらゆる地域の国民が憤りを感じていた⁴³。第二にセルビアの優越的支配に対する旧オーストリア＝ハンガリー領の南スラヴ人、とくにクロアチア人の不満である。この問題の解決のためには少なくとも地方分権化が必要であったが、国王は中央集権化を強化し、クロアチア人の神経を逆撫でした。したがって、この国の内政上の不安定要因は除去されないままであった。

しかし、アレクサンダルの独裁体制は二つの弱点を抱えていた。第一にファシズムの体制とは異なり、広範な民衆の支持に依拠しなかったことであった。国王はこの体制の精神的支柱をユーゴスラヴィア主義に求めた。しかし、国王が唱道したユーゴスラヴィア主義は各民族の伝統を無遠慮に消し去ろうとしたので、人びとにはまったく受け入れられなかった。独裁政権に反発する一般民衆は消去法により野党勢力を支持した。これはとくにクロアチアで顕著であった。彼の体制は国民に受容されうる政治イデオロギーを欠いていたので、強権的な手法でしかこれを維持することができなかった。

第二に国王は対内的には絶対権力を有していたが、対外的にはそうはいかなかった。ユーゴスラヴィアの経済と財政は西欧の友好国の借款に依存していたため、その意向を無視することはできなかった。とくにこの国はフランス政府に対して立場が弱かった。加えてユーゴスラヴィアは、ルーマニアを除いて国境線に不満をもつ国に囲まれていた。とくにこの国の内政上の弱点を知るイタリアのムッソリーニはアレクサンダルを外交交渉で見下していた。

アレクサンダルは居心地の悪い状況を脱するため、内政を安定させたいと常に願った。ところが、彼はこの国の複雑な問題を理解しようとはせず、本質的な改革、とくに国家構造の再編の必要性を最後まで考えつかなかった。彼が試みたことは、最小限の譲歩によって野党指導者を個別に体制に取り込むことだけであった。しかし、提示された条件に満足しない野党指導者は国王と妥協しようとしなかった。

セルビアとクロアチアの野党は共に国王独裁制に不満をもっていた。だがその不満の内容には相違があった。セルビアの野党は政党が政治の場から排除されたことを最大の不服としていた。それゆえ、彼らは議会政治の回復を最優先の課題とし、全野党が議会政治の復活を求めて結束すべきだと主張した。彼らの立場からすれば、クロアチア農民党が求める国家構造の再編は議会政治が復活した上で協議の議題に上る問題であった。しかし、クロアチア農民党の不満は、憲法や議会が廃止されたことではなく、中央集権的な国家構造が何の変更もなく存続していることであった。国家構造の再編問題で政党間に見解の相違があれば以前と同じような争いが起きるという理由から議会政治の復帰を国王は容易に拒否することができる。それゆえ、クロアチア農民党は、国家構造の再編問題で事前に見解を一にして初めて独裁制の終結に向けて有効な共同行動を起こすことができると主張した。

クロアチア農民党は支持基盤に絶対の自信をもち、待機戦術を続けた。彼らは安易に妥協をした過去の失敗を繰り返さないと固く誓い、消極的抵抗の貫徹によって政権側を徹底的に焦らせる戦術を採用した。彼らは独裁制の終結をめざして野党間協定を求めるセルビアの野党に対しては、国家構造の再編問題について統一的な見解を求めた。しかも、そこで提示される国家構造は、セルビアの優越的支配を排除し、諸民族の対等同権を実現させるものでなければ協定交渉の基礎にはならない。これがマチェックやトルムビッチがセルビアの野党陣営に突きつけた交渉開始の条件であった。

セルビアの野党三党は政権から排除され、野党として共通の利害関係にあった。彼らは共に国王とクロアチアの野党との妥協が成立することを恐れた。そうなれば無期限に政権の座から遠ざけられるためである。ところが、議会制時

代からのライバル関係を引きずって、三党はまとまった行動をとることができなかつた。彼らは、協定締結に向けて高いハードルを設定するクロアチアの野党に対して、次第に対応が分かれた。急進党はクロアチア農民党との協定締結をあきらめ、国王側との妥協に傾いた。しかし、民主党と農業者党はクロアチア農民党と是が非でも協定を成立させたいと思い、連邦制を容認して国家構造の再編問題で大幅に譲歩する構えを示した。かつては単一制国家しか念頭になかつたセルビアの野党の状況を考えると、これは大きな変化であつた。

ところが、国王の方針は相変わらず野党勢力の分断とその指導者の取り込みであつた。1934年に入り、外交上の窮地に陥つた国王は急進党とスロヴェニア人民党を政権与党に吸収する工作と共に、クロアチア農民党党首のマチェックに統一国家の支持声明をさせる交渉を並行的におこなつた。政権の座への復帰を渴望する急進党とスロヴェニア人民党は国王の働きかけに応じる構えを示した。しかし、ラディッチの失敗を教訓とするマチェックは獄中での交渉には応じなかつた。彼は国王の窮地をよく承知していたので、その要求が完全に満たされるまでは協定に応じない構えを貫いた。

以上のことから、南スラヴ人を集権的な単一制国家に統合する試みは国王独裁制によつても成功しなかつた。国王は自らの権力と体制の維持のためには中央集権制を緩和し、何らかの形で複合的な国家編成を容認することを求められていた⁴⁴。この必要性は国際情勢を鑑みると増大していた。しかし、集権的な統合路線の放棄は国王がどうしても避けたいと考えていた解決策である。そのような決定は自分の失政を認めることになるからであつた。まして複合的な国家への転換は国王の念頭になかつた。国王は結局事態を打開できず、反対派の不满を一身に集めて不幸にも凶弾に倒れた。クロアチア農民党との妥協は、アレクサンダルの死後に国家元首の機能を代行したパブレ公の脱セルビア王的な決断を待たなければならなかつた。

註

1 アレクサンダルの考えには中央集権的な単一制国家しかなく、地方分権的な国家像はな

かった。まして国家の中に国家を認める複合的な国家構想はなかった。たとえば、1928年6月の国会殺人事件の直後、連邦制を認めるくらいなら、クロアチアをこの国から切り離すと彼はプリビーチェヴィッチに語った。(Svetozar Pribičević, *Diktatura kralja Aleksandra*, Globus, Zagreb, 1990, p.68)。独裁制導入前夜に実施された政党指導者と国王との個別協議の場でクロアチア農民党の指導者マチェックはこの国を構成する7つの地域に立法府と行政府を設置することを提案したが、国王はこれを一顧だにしなかった。国王の国家像は終生変わらなかった。暗殺事件の年に実施されたマチェックとの間接的な対話の過程でも、国王は国家構造の変更をまったく口にできなかった。

² Branislav Gligorijević, “King Aleksandar I Karađorđević”, in Peter Radan and Aleksandar Pavković (ed.), *The Serbs and their Leaders in the Twentieth Century*, Aldershot, 1997.

³ 彼は国王に謁見した際に指示を受けた。バルグジッチは旧知の友人を訪ねることを装って、急進党のミシャ・トリフノヴィッチ、民主党のリュバ・ダヴィドヴィッチ、農業者党のヨヴァン・ヨヴァノヴィッチのそれぞれと個別に会合をもった。

⁴ Todor Stojkov, *Opozicija u vreme šestojanuarske diktature 1929-1934*, Prosveta, Beograd, 1969, pp.260-261, Ljubo Boban, *Maček i politika HSS 1928-1941 1*, Liber, Zagreb, 1974, pp.85-87.

⁵ Stojkov, *Opozicija*, p.261.

⁶ Jakob B. Hoptner, *Jugoslavija u krizi 1934-1941*, Otokar Keršovani, Rijeka, 1972, p.64.

⁷ *Ibid.*, p.65.

⁸ Stojkov, *Opozicija*, p.238. ユーゴスラヴィア側はフランスが経済支援に応じないことに苛立っていた。しかし、彼らの不満はそれだけではなかった。ユーゴスラヴィア側は、フランスとイギリスが小国の利益を犠牲にしてイタリアとドイツの要求を満足させ、ヴェルサイユ体制の維持を図ろうとしているのではないかと不信の眼を向けていた (Hoptner, *Jugoslavija*, p.15)。実際フランスは、ナチス・ドイツの対外膨張をイタリアとソ連を取り込んだ多国間協定の樹立によって阻止しようとしていた。最初の課題はドイツによるオーストリア併合の阻止であった。フランスは、オーストリアに対する影響力をめぐってイタリアとドイツが競合関係にあることに目をつけ、イタリアを後押ししてドイツを抑えようとした。それゆえ、フランスはイタリアとの妥協を促す方向でアレクサンダルに強烈的な圧力をかけていた。このようなフランスの態度は、ベオグラードの支配層をして、フランスとイタリアはユーゴスラヴィアの譲歩の上に接近しようとしていると確信させた (*ibid.*, p.24)。

フランスは小協商三国に対しソ連の承認を推奨し、チェコスロヴァキアとルーマニアはこれに同意した。しかし、アレクサンダルはこれを頑強に拒否し、フランス政府の不興を買った。しかし、お互いに不満をもちながらも、フランスとユーゴスラヴィアの両国は共に見解の相違を調整し、伝統的な友好関係を維持することを望んだ。この目的をもって、1934年6月末、フランス外相のバルトーがベオグラードを訪問した。バルトーは国王アレクサンダルとも会談し、外交問題を含めてあらゆる問題について意見を交換した。両国の見解の相違と相互の不信感は払拭されなかったが、二人は協議を続けることで合意をした。そのため、今度はアレクサンダルがフランスを公式訪問することになった (Stojkov, *Opozicija*, pp.263-264)。

⁹ Boban, *Maček i politika HSS 1*, p.112.

¹⁰ Ljubo Boban, Svetozar Pribičević u opziciji 1928-1936, Institut za Hrvatsku Povijest, 1973, p.128, Stojkov, *Opozicija*, p.267.

¹¹ Boban, *Pribičević u opziciji*, p.128.

¹² Stojkov, *Opozicija*, pp.266-267.

¹³ *Ibid.*, pp.267-268.

¹⁴ *Ibid.*, p.114.

¹⁵ Stojkov, *Opozicija*, p.268、Boban, *Maček i politika HSS I*, p.114.

¹⁶ トルムビッチはコロシェッツに対しこう述べるようにスモーリヤンに指示した。「もしスロヴェニア人民党とムスリム機構がこの連合に加わるようなら、ザグレブの野党陣営はこれをクロアチア人に対する敵対行為と見る。このあと我々は完全に自由な行動に出る。彼らが再びセルビアに協力しクロアチア人に敵対するならば、将来その結果に対する責めを負ってもらう。ヨーロッパ、とくに中欧の現状では将来はどのようなようになるか分からない。だが一つははっきりしていることは現在の条件では安定はあり得ず、それゆえ別の土台に基づいて安定化を求める必要があることだ」(Stojkov, *Opozicija*, p.269)。

¹⁷ Boban, *Maček i politika HSS I*, p.115.

¹⁸ *Ibid.*, p.116. スモーリヤンはサラエヴォに向かい、ムスリム機構の幹部と会談した。ここまでの経過についてスモーリヤンはトルムビッチにこう報告した。「コロシェッツとスパホは(政権参加の)誘いを受けたならばこれに飛びつくだろう。彼らは野党の状態に飽き飽きしているからだ」(Stojkov, *Opozicija*, p.269)。

¹⁹ *Ibid.*, p.269、Boban, *Maček i politika HSS I*, pp.117-118. 実際、議会制時代の政党に対する国王の不信感は根深かった。ラーザ・マルコヴィッチは急進党の合法化の承認を国王に請願した。これに対して、国王は政党の承認は自分の権限ではないので、政府に申請せよと素っ気なく述べ、これを却下した (*ibid.*, p.118)。

²⁰ 興味深いのは、ストヤディノヴィッチがスパホも政権に加える必要があるのではないかと述べたところ、国王はムスリム人の名前は聞きたくない様子だったと答えたことである。つまり、ムスリム機構は国王の政権構想では考慮の外に置かれていた。

²¹ Milan Stojadinović, *Ni Rat Ni Pakt*, NIP, Beograd, 2002, pp.301-302.

²² その理由は主導権争いにあつた。両者は二つのグループの統一に原則的に同意していたが、統一の手続きに見解の相違があつた。ウズノヴィッチはまず中央レベルで二つの急進党グループが暫定的に総務会を形成し、そのあと州と地方の組織を統合することを提案したが、スタノエヴィッチは逆の手続きを求めた。ウズノヴィッチのねらいは自分に党の主導権を確保することだとストヤディノヴィッチは見ていた (*ibid.*, pp.303-305)。

²³ *Ibid.*, p.305.

²⁴ *Ibid.*, p.306.

²⁵ *Ibid.*, pp.306-307.

²⁶ たとえば、1933年10月、スルシュキッチ首相の更迭説が流れたとき、後任に外相のボゴリュブ・イエフテイチの名前が挙げられた。イエフテイチはクロアチア農民党の支持を取り付ければ、国王から組閣権を与えられる公算が強いとされた。実際、イエフテイチは使者をザグレブに派遣し、クロアチア農民党の態度を打診した。イエフテイチの伝言によれば、この内閣の優先課題はクロアチア農民党との協定の準備であり、第一にマチェックの釈放であるという。ただし、マチェック釈放の条件は、クロアチア農民党が現行の王制と国境線を問題にしないと表明することであった。イエラシッチから知らせを受けたトルムビッチは、彼らを見捨てるように助言した。イエフテイチはそのあと極秘に刑務所に使者を送り、同様の提案をマチェックに伝えようとした。マチェックはこれをセルビアの陰謀と呼び、伝言は聞かなかったことにした (Boban, *Maček i politika HSS I*, pp.100-101、Boban, *Pribičević u opziciji*, p.127)。

²⁷ Boban, *Maček i politika HSS I*, pp.101-102. このあとも国王側の取り込み工作は続いた。彼らは頑強なトルムビッチを避け、他の党幹部の抱き込みをねらった。1933年11月初め急進党のヴォヤ・ヤニッチがザグレブを訪れ、宮廷から派遣されたと称して故ラディッチの家族に面会を申し込んだ。だが彼らは面会を断った。同年12月半ばには国王側近のディモヴィッチがクロアチア農民党幹部のペルネルに対し、近く政変があり、暫定政権が形成されるがクロアチア農民党はどのような態度をとるか尋ねた。ペルネルはよりよくなる変化は歓迎すると一般的に述べるにとどめ、マチェックが獄

中にある限り話し合いには応じないと強調した。ディモヴィッチはペルネルに対し国王に呼ばれるかもしれないと述べた。だがこれは虚言であり、ペルネルは宮廷に呼ばれなかった(*ibid.*,pp.102-103)。

²⁸ 以上はシュバシッチの最初の訪問のあと、マチェックが彼に対し書面で述べた情勢分析である (*ibid.*,p.124)。

²⁹ シュバシッチは第一次世界大戦中には激戦地であったテッサロニキ戦線でアレクサンダルが指揮するセルビア軍と共に戦った。このため、テッサロニキ戦線の元志願兵の一団が宮廷に招待されたときにマチェックとの親密な関係が話題になり、彼ならマチェックと話が通じるのではないかと宮廷側に推薦した。このとき同席していた宮廷の幹部がそのことを国王に報告した。このあとシュバシッチは宮廷に呼ばれることになった。

³⁰ *Ibid.*,pp.122-123.

³¹ シュバシッチは国王と会談内容の他に元首相のジフコヴィッチの提案を伝えた。シュバシッチはジフコヴィッチから、彼の考える協定案をマチェックに伝えるように依頼を受けていた。ジフコヴィッチはマチェックとの密約を成立させ、国王の好感を得て首相に返り咲くことをねらっていた。彼によれば、国王は新しい解決策を議会主義的な方法で用意したいと考えている。マチェックが望むなら、次回の選挙では合同の候補者名簿を提出してもよい。政府には彼自身が入閣してもよいし、クロアチア農民党から代表を派遣してもよい。クロアチア農民党には内相のポストを含めていくつかの閣僚ポストとサヴァ州の知事のポストを与える。シュバシッチははっきりとそう述べなかったが、ジフコヴィッチがマチェックに対してその妥協と引き替えに上述の条件を提示していることは明らかであった(*ibid.*,p.124)。

³² *Ibid.*,p.124.

³³ *Ibid.*,p.125.

³⁴ *Ibid.*,p.126.

³⁵ *Ibid.*,p.126.

³⁶ *Ibid.*,pp.126-127.

³⁷ *Ibid.*,p.127.

³⁸ *Ibid.*,pp.127-128.

³⁹ *Ibid.*,p.128.

⁴⁰ Hrvoje Matković, *Povijest Hrvatske Seljačke Stranke*, Naklada Pavičić, Zagreb, 1999,p.331.

⁴¹ Boban, *Maček i politika HSS I*,p.129.

⁴² Matković,*Povijest*,p.332.

⁴³ そもそも独裁制の下では不正や腐敗の一扫は期待できない話である。議会もなく、言論の自由もない状況の中では不正や腐敗に対するチェック機能が働かないからである。たとえば、独裁制の最初の内閣であるジフコヴィッチ内閣の閣僚の行動様式は、議会政治期の内閣の閣僚の行動様式と大差なかった。彼らは職権を利用し、それぞれの省庁で相変わらず身内最上の職員人事をおこなっていた。しかも、政党政治家ではないジフコヴィッチ首相自身が気に入らない武官および文官を退職・配転させ、自分が信頼する者をそのポストに就けたことが指摘されている (Stojkov,*Opozicija*,p.81)。

⁴⁴ 周辺諸国の事例に倣えば、もう一つの打開策として、強力な全体主義に訴えるという選択肢も考えられた。しかし、この解決策はこの国のような複雑な多民族国家では実現困難であったろうし、何よりも国王の政治手腕に対する人民の信頼が失われたこの時点では遅きに失していたと思われる。